
編 集 後 記

本号の各位の論文や研究ノートをみるにつけ、言語や教授法の議論の背後に、外国語学習への学生の動機づけをいかに高めるかという問題意識がうかがえる。興味がわかなければ何事もおもしろくない。ことに外国語学習は積み上げ式なので、いったんわからなくなって興味を失うと、苦痛以外の何物でもなくなってしまう。

語学に対する学生の興味をどうしたら開けるのか。多くの学生が特段の目的意識なしに外国語を学習する状況では、まずその言葉を実際に使用している人々に対する認識が与えられるべきではなかろうか。学生時代、私は中国語の学習をしたのだが、大学の授業では得られなかった言葉のリアリティを、ある日、居酒屋で中国人と話したときに感じたことがある。またある日、映画館で中国の映画に涙したときに感じた。また、二週間の中国旅行が決定的なリアリティを与えてくれた。要するに、その言葉とそれを使用する人々の個性とが結びついて言葉の触感が得られるのである。それは教科書の練習ではむずかしい。教科書の練習の重要性和それへの意欲は、その外国語のリアリティ獲得後に再認識されるものなのであろう。その意味で外国語の学習には、その言語を使用する人の個性や生活・文化と接続する側面が必須なのではなかろうか。

先日、LL 研究室主催の外国語教育研究会で映画に関する討論がおこなわれた。この映画は *Familientreffen* というドイツ語のドキュメンタリー映画で、監督は Sarah Derendinger というスイス人。内容は Christoph Marthaler というスイス人の演出家が、あるホテルの百周年記念で依頼されたお芝居を、そのホテルを舞台にして完成させるまでの記録である。単なる記録ではなく、彼がつける稽古の様子を軸にして、俳優たちは映画そのものへの演出もするし、ホテルの様子やべつに入院している俳優の独白なども織り交ぜた不思議な展開となっている。上述のような外国語のリアリティという観点からすると、この映画の興味深い点は、じつに個性的で魅力的な俳優たちの存在を味わいながらドイツ語が聞けることにある。とくに演出家が俳優たちと話し合いつつ演技とストーリーを創っていく際の語りや歌は、映画や演劇のビルドアップされたものではなく、かといって単なる日常的なものでもない。私はドイ

ッ語ができないが、言葉の肌触りを感じ取ることができた。それは映画だから感じ取れたのではなく、この映画だから感じ取れたのである。映画だけでなく、映画鑑賞後の討論も重要で、自分の茫漠とした感想を確認できる。学生の外国語学習でも、この研究会のように、言葉のリアリティを感じ取る機会を作るべきではなかろうか。外国語学習の動機づけにとって、このような機会は一つの可能性だと思うのである。(M.T)

第39号編集委員会

委員長	土屋昌明
委員(50音順)	池尾玲子
	井上幸孝
	上原正博
	王伸子
	寺尾格
	フリックマン, ジェフリー C.